徒然要草 一

内閣文庫

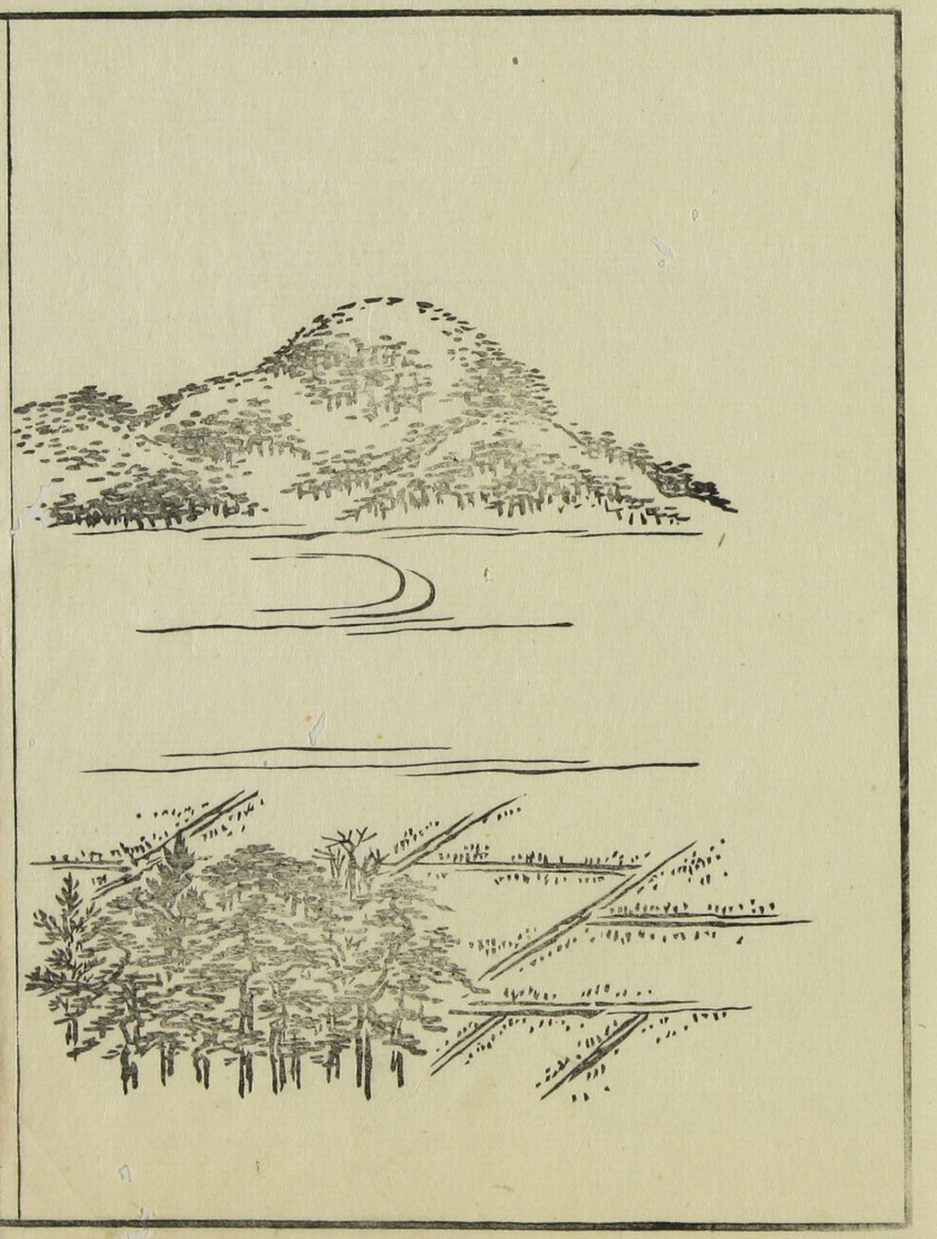
# 徒然要艸序

釋無好徒然草自羅山林祭酒以下注者無慮十數家可謂詳悉無遺者而吾曾祖厭求上人亦為之解名曰要艸蓋上人解之其諸異乎人之解之歟何也徒然草之為書也雖詹言之之言所謂隨筆漫筆者當時世態人情往往可見而駕之以婉約辭感人



内閣文庫

心者深矣況有其要帰者厭欣欽慕
吾宗風者上人有取于此乃申之以
相即無相之理使讀者益感無常之
迅速止悪修善常稱杲號以發出離
往生之機是以不必追章以費解必
揭關係佛旨祖意者以示之而已蓋
此鮮上人在勢州豊原天王山之草
葦起草跙今凡百年手親書録者三
世相傳以至于余顧余以衰老退休
洛東岡崎艸菴即曽祖上人圓寂之
地以故夙夜感嘆祖德無量手澤所
存時或省拜之以深感廣濟之高志
會山都貞河義言二子来請鏤梓於
此不敢秘之校寫一通以授之刻成
貽之同志冀據此注釋仰信自然悟
道之密意永脱趣生輪廻之業繫則



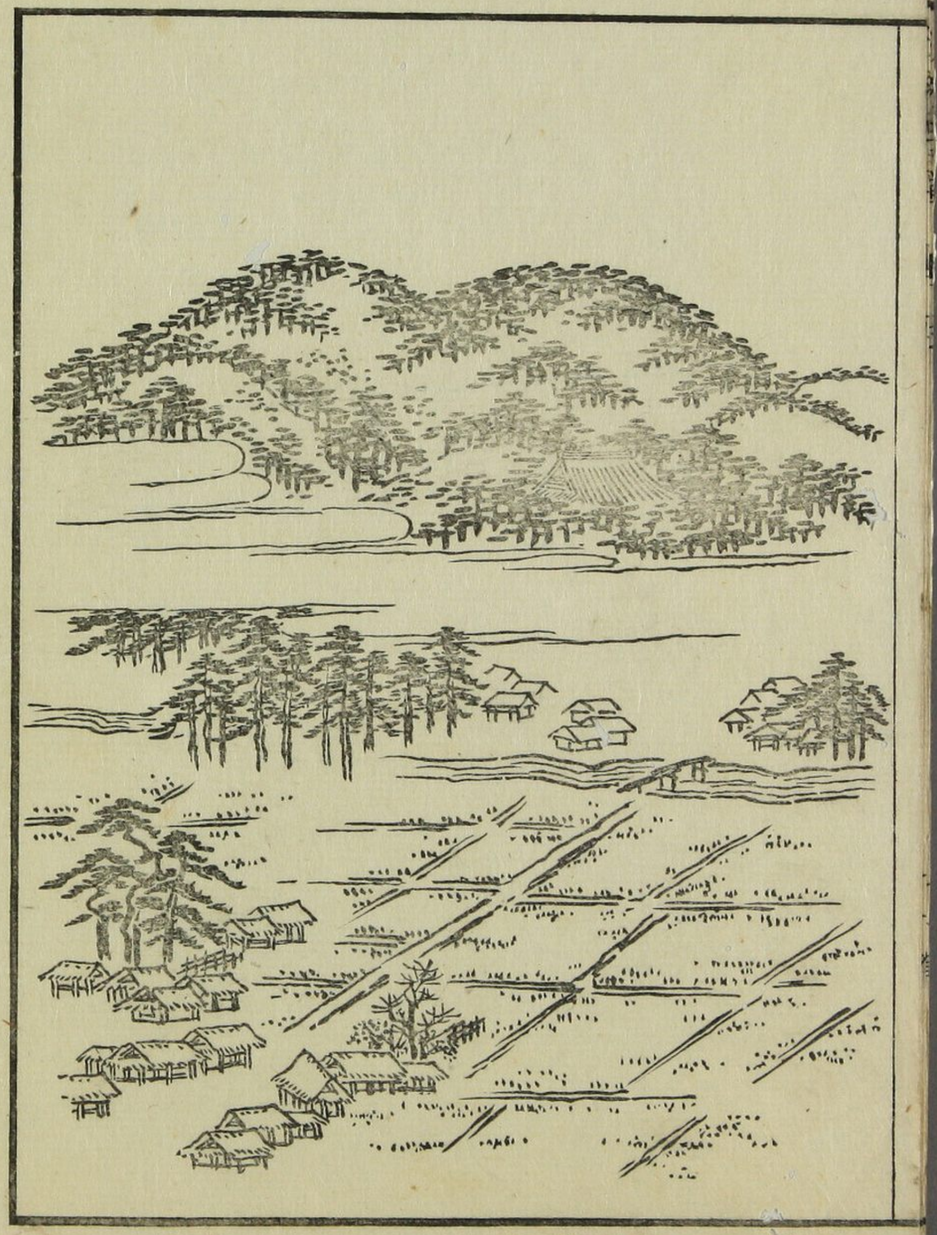
斯書即為苦海寶筏云爾

天明三癸卯年春三月

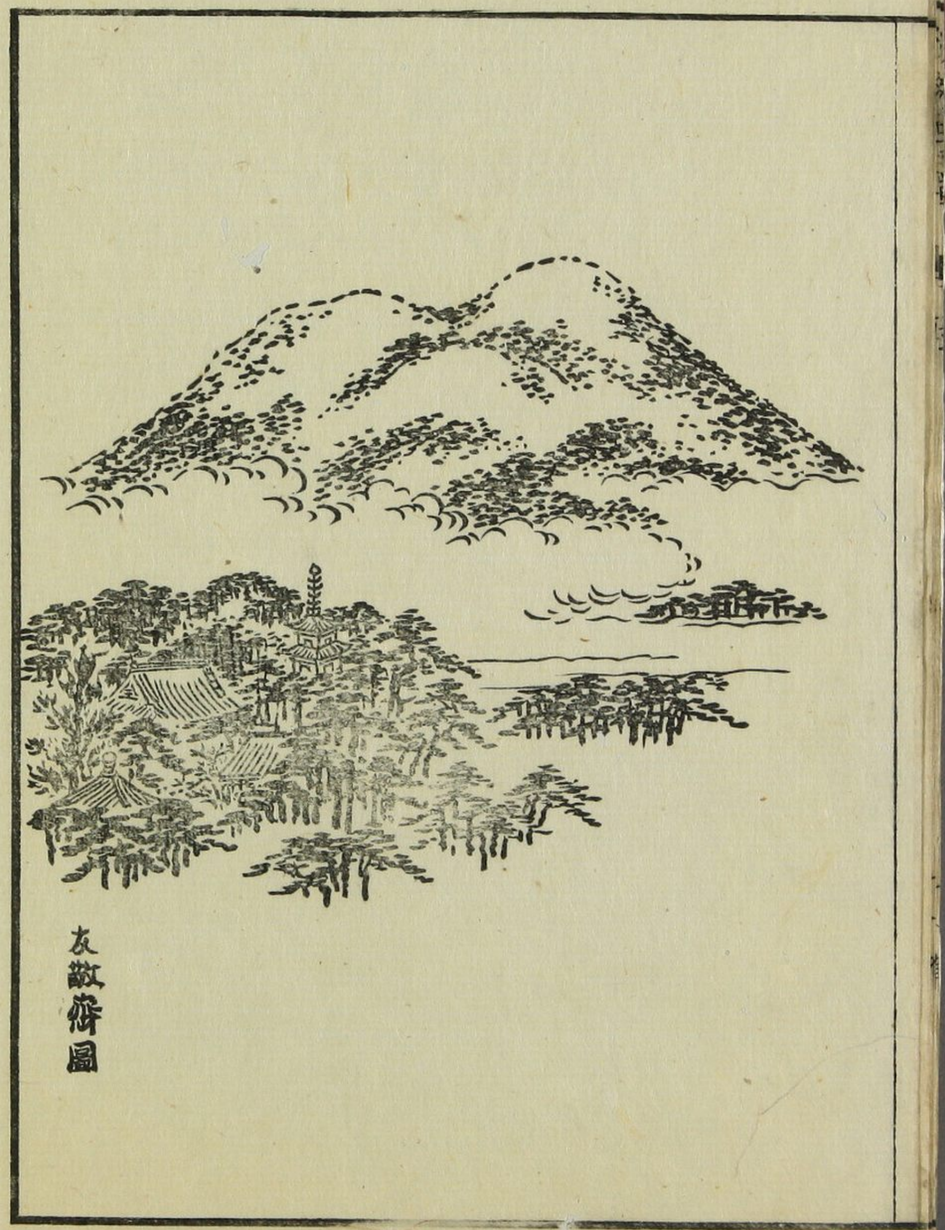
京師前住大雲院沙門潮音於

洛東岡崎艸菴書

沙門潮音 潮音



洛東中
岡崎
厭求上人
舊跡



友敬齋圖

人きく世ふ所をそなふ。栄乃あるとこ戸城内く祈ぜ。
きてていふ人のわるぐふなれ者乃居れうたた
的著弥陀の名号とそなへ申べ。ねまぐるこれ
猿ゑ似くゑ欲の枝よりひうつてよりれ
ごとちうこうをめくところ。ちひハ聖ご成れやう
ゑ六蕚の使よわしをまるく。あやしく拍ぞる
ほ。是ゑ会うやせん京ん志だくたるうや
いうむ。れふあをては世文城ひ絲者て。見ぬ
世乃人と友とするいこうなふるぐさむりぞるれ。
事志ぎくて南ぐれくうあまバ。我者ゑんう
利わうと地ふ佐とえうひくぐ。半ぬを
れよ益ゑをなす愛理のうえバえうう

らるゝ物にこそあめれ。されど世をうらみ、
無始の妄執にうかれ、分別をもとゝし、扇の志めらるゝ
ものゝ心と思ひ、くつ引ぐ雪芽と名づゝ
腸づゝみてあふげしく涼りゝめんれ
ぬるさをいとはおしゝ名殘

擬つゝ寄に対くしんとして芳こ書

いやゝ波羅乃波れきんちやく

于勢刈を原れ星天王山

住もるかれ也



徒然要草

初　いとや世に生れて、
二　古乃聖の古代を
三　羨にいみしくくを
四　後れ世の事
五　不幸小熱に志つめる
六　我身れ風んこゝろ
七　わゝ野くゝ寂
八　世の人乃心南くゝ次
九　女ハ髮れめてこゝんこゝ
十　家居のつきくゝ数

# 徒然要草

抑々つれ〳〵と云を両字にハ徒然と書り。徒然ハ
二字にハ熟別二種の和訓あり。つれ〳〵と云ハ熟の和訓なり
別の和訓に三ツ有。一ニさびしと訓ズ。二ニ事なきと訓ズ。
三ニ志川かと訓ズ。一にさびしと訓ずる時ハ寂寞つれ〳〵
なり。其の心ハ心ざしハ静なる様なれど人の嫌なる所よ
ひとりゐて庵のうちに籠見ず愛ずして眺むれ
住所と云なり。これハ寂寥のつれ〳〵古今に山里ハ物のさびしきことこそあれ
住よかりけり すみなれたれハ 新續古今にのかしに浅茅が原や中々に 人めおもそそ 西行の歌よ
志川かなる岩の上にすまひかりけて 二ツ事なきと訓ずる時ハ境界の
つれ〳〵なり。甚太かめ一ツもなし。又水をも手にし
てかく文ハ一来を夕談にハしれぬまハおさむる術の

ありそめ。朝夕なくてうるはぎ、ん抱こそあらめ。さ
外のあいなのをりこそでの物べきなり。これ是後家
乃つしく、こ式古家にはなくにあらはれどたゞさゝ
古家に敷ものなくなりぬるこそ、ものあれ。まして式
ものこそ、ものあれ。二よ、ものこそ、ものあれ。新續古今に衣たゝみ
かさねもの式。二よ、ものこそ、ものあれ。例ど俗間ハ人れつしくなり。
寂聯慶然無為法者の人こそ人ハ生をも恨ゞ死をも
みくまゞ。あ式もいやぬ。ゞなれをも求めゞ。天理り
ゆゑ因果にすゝくんこゞ。玉葉に宮ゝ行ハ
續古今に、むの月の水もよ。ものるれ。これハ是ん乃つ是くなり
きゞ志ゞ。ものゝ。ゞ。乃ハ行ゞ。草こそハ茅
茅紫茅京法物のごゝ又四つ乃茅あり。一つ
因縁の義因とハ者。縁ハ後ん志物を者。



志物をたよりとするたゞひおほし。いそゆる意草
思ひ茅力茅云式義茅。麁茅茅茅これ是因縁義之
ゆゑ。ゞ式文を者。後ゝて世を志り佛を志ひ
法式志ふハ意茅物を。ひ茅ん。ゞ式文式力ゝて世を
いそゆるれ乃ゝ志ゝむ者。ゝ物ハ力茅ん。ゞ式文乃
ふくゝを人を後り義ゝを志むるハ云式義茅なり。
ゞ式文乃中ふ元もいそゆれめおりゝ式事をおほし。
是ハこれ茅茅なゞべし。ゞ。始ゝ志ゝ物る業をハ
茅むゝをゞゝふゞ式文を者。後ゝて神て佛道
修行よりむくハ後世式茅むゝをゞゝそいそゆ。
新物乃者。後ゝなれゞゞ式文を草ゝ云ハ因縁の義之
二つふハ後順式義。茅ハ後風東西ゝ風ゝ志ゝ

仏のまへもなびくはんぺい又ハ儒仏老神仏のまへ
なびくハんぺいをもてびき者乃ごとくにしてもてなす
論語ハ君子乃法ハ風ぷんぷ人の法ハ草ぷんぷ草ハ風に
くゝるゝ時ハ必ず偃ぬべしといへり。しかるとき
に佛の法ハ風ぷん菓好乃法ハ草ぷん菓好乃法ハ佛の
法風ハ草ぷんぷ草ハ乃ゆゑに日くぶん分とあり。
ゆゑ菓好の法ハ風ぷん後見乃人の法ハ草ぷんこの文意
法風ハ草ぷんぷ草ハ乃ごとくにしたがひ世ぞくのぶんと
思ひまどひ乃ゆゑを分乃無者と者ものごとくもん靜
なるんぞ比えばぺい又と菓とハ酒頃乃義なり。
三つ乃ハ世者乃義ハいろ形る菓も辛くに香ハ
物よりうんかいろ和ハ無者ぷんぺい又乃始終世者事ハ



ゆゑハ世乃。同じ又者同じ云菓もあしどおくかいろ
て吳事んぺいぶの終乃ごとくなしかつあるべき者
なるぬハ無者んぺいしかしハ又乃始終金純ゞ無者すく
者ごとくかる菓ぺいるかしハ世又と菓といふハ
世者の義んぺい四ふハ不変ぬ義かいろ刑ズ。辛くの
者乃草同じかいろ刑ズ。辛くの
者ぺいつを者みて辛くかいろ事形。ぺいしかし
又乃一切始終と見るふ無者乃ごとくいろ者とかけ。無者事
ゝ云ハ生者必滅會者定離盛者必衰皆是世者。山河
大地草木樹林有情非情ごとく色ぺいごとくいろ者事
形。是別天地乃定理也ふと早竟如是無者と云ん
今ハ世者ハぶめて無者なるゝにあらぶ。於テ色去遠く

未来永々十方法界之中に万々かゝりぬる世界あり。此
世界もかつゝかゝりぬ。されとも不変此界とハ云へ此文を
除く外に同じうして世界といひ事ハ別てかゝる
ゝ也。是則不変乃徴也。又是と云ハ此文の始終をひき
つゝる名なれハ。因縁活順無為不変乃四義とかゝて
草といふなり
今此文を名付かつゝ一紙乃肝要ハ物候ふ。
行要と云ハ肝ハきもと訓ス要ハ入ると訓ス二字ふ
相の事也小大事とする文まこと。今此注ハ我々あ肝要
とも名付へく要ハ名付へさ小ハ一紙乃要ハ物候ふ
所也。初候の要ハ始中終の三所に有。始よりつゝ〳〵なる
南〳〵に日々〳〵と云ハかなへの中乃要ハ中小いとにおゝ



といひ又ハ如しと云ハ二ヶ所共に御悔乃要なり
終小不ヲ分ぬこと男ハ如と云ハ法乃のかなへなり
つれ〳〵なる南南に日々〳〵　こ云十三まハ兼好一代の
法乃よりも大悟徹底と見てこゝろ心ハつれ〳〵と云ハ
去如実相者一義空不動不壊寂静法然無為無事乃
人地に是別つれ〳〵。是乃中小三ヶ乃つれ〳〵とあり。
者三小寂と訓ス南小あるゝ世界と悟りて見まこと
天地も日月も草木国土も有情非情皆法こゝ〳〵を
寂静法然乃中の物にして一物を外の物とあること。
者こゝハ虚空法界ひろくして其中に有情非情所有
乃万法皆こゝ〳〵をはさ南るがごとく。今此虚空と名つけ
名をこゝにして我と同ふして。因縁乃虚空つれ〳〵なること

法界海波乃つれなく中よ有情非情皆ことごとく
おさまりて明らかなる波が立ふつれなくなるまに日々
ハ云へ共ことごとく世中の人つれなく乃由に日々成事成
ならべ共を由のひとゝ云へつれなくのまに日々成事と
ハ別物なり。問テ云ク前に其如実相身一義空等しハ。
いかなる義ぞや。答テ云ク法界乃理ハ云ク云ク乃理ハ云ク云ク
なれ共ゝ事に非ず。思ふとゝて希ふべき義よあらぬ。
さるしるを志ばらく見聞にませて見と云ハ真と云ハ実と
由こと〳〵別ス方法ハ皆ことゝく色心にして偽なれと実
とハいつれも由こと〳〵にして偽かしと云ハ火ハ由こと〳〵にいつく
して物とかハらぬハいつれも。水ハ由こと〳〵にひやこと〳〵く
物とうゆ法ハ由こと〳〵にうごかぬ成



そぐつに偽なし。古ハまことにかくして物と生ぬる
偽なし。善ハ悪ハ善みして物のために益とする事偽
なし。悪ハ滅ハ悪みして物のために害とする事偽なし。
因ハ滅ハ見。耳ハ聞。鼻ハ嗅。舌ハあぢわひ。身ハ覚ゆる。意
本因古に由ると一〳〵みな悪みして偽なし。彼乃ごとく
方法ハ偽なれ共ハ人とハいふ也。如と云ハゞ〳〵と訓ズ
物乃かゝるぬる成ごとくと云へ。世の者に人の云義も我
むすびにつゝ称ハ仏のごとくと云へ。さるハ純な世界ハ火を
うの火乃ごとく昔ハ火も今の火のごとく水も風も草木
因古も昔ハごとくにして今とかゝるなれ。純な世界も
ハ世界ハごとく法世界を又他方世界ハごとくみてゝ云事
なれと。何事もかゝる事なれと如と云へ。又善となせハ

善のごとく善取に生れし悪をつくしが悪のごとく三悪道より
あらんかぎりを弥陀の本願をたのみて念仏申せばかのむま
ごとくに極楽へ往生疑なしとの事もなんごとくにてかつは
理を如と云へる初いつつも明かなる事もあるべし次の縁の
あらんかぎりは仮小実相と云実相とは同じきものなれども又
誠のもとづくも別ズ今は実相は真如と一体なるべの如くう
真如実相と云へる又世実相は一切諸法の実体みてみる
りとなるべの如く小乗一実と云へる真体清浄なるべの如くう
空といふ空といふは清浄の異名なり今世理は同じきみてく
偏もなくかつる事もなくしかるに縁がうごくべうごくもど
静なるべの如くに不動不壊寂静と云へる真如実相の理が十方
法界にみちくるる。譬へは池水の波もなく濁りを去く



譬へんくるるてもめぐるべうごくも是を法然と云へるさしだし
真理は諸法なりなくるる事なを姑ぶ真体当体なれども如に無為
と云へる真理の中ふかく紀事もなくるる事もなく
ず世事と云へる中をば兼好乃境界偏を明かるかを
るもなく静かなるてこそ世事をとるべし次事
もなく待るもなく明かなるの内に日暮
と云へる世一句は得法のうへに分れる大安楽と申つ
云義と見てうる。彼明かるるは兼好なるをあるべ
三世の法仏十方九如来久住法性乃善薩附法諸九祖師
達悟道後明の人いづれもみなつしくれまに日暮
暮れる内と云へるべあるべ是をなとそ申べ
まく我の内と云事と寂静法然無為無事乃内と

菩提を只人の為とハ云ん。是則おのが為也。仏とは此只人り
仏説に本来成仏即身成仏とのたまへり又本来の
面目とは是心是仏とも主人公とも云ん是則とより此里
の為にすぐるなり。仏の法はひろしといへども此一理成
出て是則儒の天理明徳太極無極と道家の自然の徳
神道の国常立天御中主と。此理にかなへるをつまびらかにすれば
り日くされ人といふべし。この経ハつまびらかの為に日くされ次と
云ハ要の中にかなめと云けんなり又三ツのつまびらかの中よ
いづれおくもふとよせ是とすみとして略し菩提人は
つまびらかの為に日くされ人と云なり
視よむひてふりうつり扨くすし物しごとは扨こそ
かも物書けくれしバ打や志りてこそ扨ぐあげしけさ



ことふハ金剛経の應無所住而生其心といふ文の心と見しられよ
なしごとく云ハ應無所住にわたるべしふうなりゆくと云ハ而生其心
にわたるん。おほすそふ性ハ是にそふなれしわれこそ性なきこ
いふ庵き物を物くご。こそふなれしかしこそ性なれといふべき
所もすし。此只人は應無所住と云ん。されども見聞覚知に志ぐひて
自在にたるふなれハ而生其心と云ん。六祖慧能の云ク對境
心數起と云り是則而生其心なり。又をとはすと物くうたり
扨く有き為ん。この紙ハ志げくもぞ待つるなく。菩提川水の
なかるゝごとし。又心のたとへりかりのをやな事ハ電光
石火よふまも待ちてもやき物ん。形もやきんと云身んと
まもハ深にものぐらきこともあるべし。実につまびらかにすに
日ごろせよ大物菩提のみふく此おふ給の氣もなく

事を書く万事は乱れぬ。哀愁（モウソウ）とあり哀しき色と書分る

物ごとに家と世中の人のなまにんづく世を

ふとゞめくうねを世界もうちつれうとゞ見ゆまゝ

魂よむひて美面が絵しうれ世のあり様とは

と書くあるふくゝ見ゆるり

いでや先のまく世に生まれて世に形ひ世に

おほのめしみゝど乃帝（ラシン）位はいかを加こし。所乃

国まもるを蒙国ぐく人間の種ぬぞやんごと

形まで一の人乃侍有さ国は侍ふ。世ぐ人（ウド）公食人

ぐ始るきくゆくしと見面。その子むまごまぐく

きふしは放埒と歩くにはあるとまぐ程なまめかし。拙しより

ものはうとは下つるはのパのまわやまうなくしもと歩べき所なりはと

上は形ひて下は形ぬるを下は形ひて上は形ぬるをとゝ人は上も下も

初段の孫ぐ
りかくき
ゆくそなは
あれとふ
ちぶ法師
りうゝや
帝ゝあ
をのはゝ
とこまと。
次の三段目
のよ孫ぐ
いちくた
るこのま
ぢん男く
云ちぶ女こ

ちぶ次
ふはれんを
と云までの
注は年文
あ法式文芸
よ合せさう
やうよ世
ゆれこもあ
なう文ま
れ風流よ
かゝりど。
清うこの
義理をり
てたく
ちくめて
候若よ
ゑびくの
注解也
先をとむ
人はうけ
ちと古
和尚乃
実法なる
ものゝ信
ぢ色し



孫ぐふんゝ笑ゆうなうりをと学べき　かどに行けつ　と云はんく

ゆうう。はゝ。ふむ色ゝうゝを

世ぐふまれて死ふいるまぐ的苦に孫ぐつゝき事生を保

帝門をはぐ免まり下万民ふ動ることい孫ちるはかゝれぬを。

孫ぐふんを加ちる事形ゝ帝門の帝位といふりをし

ゝり下位ゝはと云を世世に生れて第乃形ひある人は

あぐゝん先ゝり下つゝはと学ゝる中のゝん。ほ見の人あや

まりくはと学ゝるゝ兼好よ我をゝれてをといあゝ。ちう

ぐゝをと学べと形ん。はゝよもべゝうゝ程よ法ちゝゝと云

白ゝ上天子より下万民ふ下つゝる云義ん。ゝ面へは帝門はみゝど

程ふ分。親ふは親主の程ふ分。一の人は一の人乃かゝふ分。そを生

くの程よ分つゝ我は安位耶和耶式は戦宝後座家職

生活人事技能学問子孫繁昌息災延命ゝど我ふ

禄ふ係まつて禄がりきこと持。たゞ係りめれといふ人あり
御門も法王も万民も。禄が下ふかゝることなれば也へり
是より下つくこハの八字を下つくともと学べき事ぞ
時よおもひ志て里がゞなる事をもみづからハいらじと思ふ
らなんど　と云ハ我聊ひの事ひしゆえかく済時さへも志
ら備しきりと人ふをおもひ口ふも云え是と志らがる
なる事をといふなるを
いとねおし　と云ハ慚愧(ザンギ)の要也。されバ我聊ひの事ひし
時こづくハ是といふじと云つくめと人ひとんへの目より
見れバ美の世の初の聊ひのかへくてそいかゞらさん
事のしみぞや。いく後の付尻持や。たゞ係けふも謹の
為ふいひ書とこそいみじとハいふべくれ含羞(アツモノ)ハ定てあれ

盛者(サカンナルモノ)ハ必おとろふ。されバあかねし時か。たゞ心ろへし時あるに
口おしかるべきに。今乃聊ひれゆへバこそ。いみじとおもふ八
いとおくしとんかる事をといひそし。ひともするハ。係の
事なく。ちりぢめゐる心と心得み。まれ又口おし
と云ハあつかるにて誦経念仏陀羅尼とてそめへた
西えれ。よしなれて我。いみじ事に人すとおもひ。口ふもいふハ。
さそくわつる口云悉やし。そしこゝろ文章とこそ見へれ
是ハこれまそろう口おしと見てゐるなるべし。又云川かしを
口おしきどあん我ハ聊のかゞゐぬ時。我とするゐえたびひ
しおりゆへうし物どうしなひ人まうでわし時文ゟ習
義を能も。さぐれらうし人まさくらわしごとかゐるおりて
今更なかなね事とまやこそいづゐ口おしくおぼべきぞ

わらひしこれ其ひめとうらめしくおもふこそ有ことに
はなれくも縁となれしも此仏わんんハ心すて心得
をぢしめ擬く口むしきらぬとどう断愧たへしき
此世へいてしロおしの白ハ断悩の要なり
法師ばかりうらやましからぬものハあらじ。人にハ木の
はしのやうに思はるるよし。清少納言が書るも実に
さる事ぞかし　と云ハ上天子より下万民にいたるまで
殿ハきことうら山敷思はれ。おほかる中に法師ばかりハ
さのと観じぞうらやましからず。いかなる大寺本寺の山
住持たる官高位の僧ハ威有様を見るとも羨ともなしで
観じ候ふうやましかれ。衣食財宝に富すぐいさゝうを観
つぞうらやましからむハおいそうおげもなく深く末の



はしのやうに思はるるべきなれどもうらやましからぬといかの事を
とみてよめバ法師ハよからぬものと云やうに聞ゆるなり。
枕草子を引ぬるとハかんて候。枕草子ニ云ク
思はん子を法師になしたらんこそいと心ぐるしけれ
是ハ世中の人の親母家をおもふくといふて　法ハ親母家をおきてぞ　是ハ清少納言がかゝくといふて
なほこのやうに思ひたらんこそいといとほしけれ　世中の人の云ての
清少納言が心ハいとうすれバ木のはしのやうに思ひさそく　ただひし事と見え
いかに人事あとおもひていとたきと思ふこと見てけり　文義因り
ことなるものと思はれ。誠かに異事と思ふ時ハ法師ハ
法世の人とはことなる事おほしおほよそ在家の人ハ
親に孝ぶ家を保り。法師ハ親とをむきて家と出る。
在家の人ハ位を望むとあげく。法師ハ位を望まぬもの。
在家ハ公役あり。法師ハ是をのがる。在家ハ君に仕へ武ハ

商賈巧工の業なく身を過しなすべ。法師ハ乞食して
身をたもつ。在家ハ酒肉五辛を食ども。法師ハ是をいむ。在家ハ
此世ばかりをつらして物を願ひ事をうらやむ。かゝる法師ハ
後の世を思ふに祈ひて物をもとめ貪りやますしげく欲
よくなる故に仏法をうしなふ浮世の人法師を木のはしかどの
やうにおもふ。清少納言ハ法師のごとくなりがたき仏にしても
思ふを兼好亦是を感じて此草子に人にハ木のはし
のやうにおもはるゝよと清少納言が思ふところを実に思ふ事
歎しと書る此云兼好をかへしてハ法師ハ浮世の人よ
かゆるハ大形あさましく歎しられぬるにいみじくあれ
又浮世にありて世をいとハぬ人世俗のつくる人と見るべくハ
身をいたづらになしぬるをいひて殊更に歎しき事

世におほけし。遁世の人いとむ罰かれど。古語に庸愚の愒々
たるハ一賢の唯々たるに志しといへり。よ縁りなる人いかに従
はほくあるまじて。歎しき第一なりし。凡事に何かと思ふ事
一人なりとも賢人の心をもはづかしめよと云語の心。古家に
世中の人にハ木のはしと おもはるゝよとかゝれたる 此事に兼好そしれるとのゝしりかきしと見て
たり是ハ心しれ法師上下の偏なり
いきかひ給ふたのしみにつきていみじとハ思ひてさ
増賀聖のいひあむやうに名聞くるしき仏の御教
にたがふらむとぞ歎たはしかる　と云ハ大寺の住持衆内
などの時対のをはた名かち達の侍などおほくめしつれ
威やかすと云。これハ是よからぬ法師下不得ん
ひとへの世捨人ハ中々にあらまほしき事もありなん

外さゆると云ハひとすぢの義一向と云ふ心。何とも世話捨るま
みくぱけしる徳も取く是ほどふ氣色もなし。名聞ぐるしき
こゝかな事ればこれハ世中不備と見えたり

人ハ形ありさ姿のすぐれたらんこそあらまほしかるべ
屈事れし。物うちいひたる聞にくからず愛あいきやうありて
云葉おほからぬこそあかずむかひまほしき事說

と云中に三業の義あり。形ありさ姿のすぐれたらんハ身業
形すぐ勝たる人を云。是れハ是身業の義なり。物うち
いひたる聞にくからず言葉なども乃すぐれたる人ハ
是口業の義。声(コハ)色(イロ)と云詞ありてうつくしきを
もある人ならバ人の聞ぎやすきも有べきぞ。これハ是意業の
義と身と口と意と三業が人にすぐれバあかずむかひ度ほし

かるべき人がらそとのまゝ次ハ玉の卮(サカヅキ)の底なきに心もちの人
なるべし

然ぐるしと見る人の心たとへ世も本(ホン)性(ジヤウ)見えし世
こそ口おしかるべき事に思ひ形こそ生(ムマ)れつきさだめて緣ハ
なじかしの賢(カシコキ)も思ひしきにもうつさばうつらざらん乎。
形心ざま人よりも勝たる人もはえ取くなきぬれば思ひくるる
かやふくさげ物る人にも負もち兩ぐ思ふ事ふかきに本と
けりこそかいなきわざなき

形ありさまよりれ人ハめでたしと見ゆるなるべし。さやうの人の
心やしく性根のありさまを當世性けりしいかん。兩くともり
口おしかるべき事。形こそ生つきたらめ心ハなどか賢より
かしこきにもうつさばうつるべき事。總りふ心とゆるされハ

いとはしき事をよくあきらむべき事ぞこのゆゑなり
はたしかるべきよしの旨は断惑の要なり
ありたき事はまことしき文の道。作文和哥管絃の道。又
有職に公事の方。人の鏡ならんこそいみじかるべけれ。
手など拙からず走り書き。声をかしくて拍子
とりて

とぞ云物はありたきとはまことしき文の道と云は佛道
無上菩提。儒の天理明徳。老荘の自然又道。神道の天御中主
此理を明らむる道をまことしき文と云。此趣を索むる小唯
なれど見る哉云ふは心をこる中に。おのれ和の道を学び
にとめ絶せよと。それへし文章と見てよろし。只書を只見るを
ひがなすれば。まことしき道の文とこそ学ぶべきなり。まことしき文の
道と云て文の中の道とよく修し学ぶべしと。それへる



ことわりと見えたり
いと道志ありとも本の如くとぞ云んはをしくぐらを必げず
なくばこれこのみてはじめをとなふべしと云ふ心なり
論語ニ生而知之者上也学而知之者次也困而学之者
又其次也困而不学民斯為下　今此論語の詞のごとくなら
に困而学之者又其次之と云といふ道志ありするも懸くこ。やはらげ
て文小知ひろしと見えたり。百五十段めに能をつかんとする
人と云文にいまだ堅固かたほなるより上手の中に交りて
そしりわらはるるにもはぢず。つれなく過ぎて嗜む人
天性その骨なけれども道になづまず。みだりにせずして年
を送れば。堪能の嗜まざるよりは終に上手の位に
至り。徳たけ人にゆるされて双なき名をうる事なり。天下の

物の上手といへども。はじめハ不堪の聞えもあり無下の
瑕瑾もありき。されども其人道のおきて正しく是を
おもくして放埒せざれバ世のはかせにて万人の師となる
事諸道かはるべからず。次に文章因而学之者と云ん
下戸ならぬこそ男はよき事　とこんハ下戸なるハ
上戸也。世中の人上戸といへども只酒のむ人の事とばかり
心得り。兼好の意ハ左にあらず文章をよく学びて上戸と
柏子ならずと云ふ事ハ皆人の学ぶべき道の家業あげ。
いふ事あらずものならず。下戸ならぬこそ男ハよけれと
いふをハ道とまかずく人をしをも学ぶゆゑんなくしく
学びたらぬと云んとしてへるひとしてくらんこれあるハ
世中に上戸といふ者あり。いはゆる茶上戸俵の上戸砂酒



醤油搾ニ詰める時必用なるハ是のみ。此上戸と申なれど
紛れておほくつきいる事何れの物もらぐことなりがたく綿入
る所の事も好しとのふまゝにたさぬる業なり。兼好是を
さんとして法人ハよし也何事も詠学ぶとも上戸ならずにと
どくことありかなしむとありりきびかるもく修学ぶべし
この心を見るべし。又上戸と云ハ道の是を名をこまへハ聖徳太子
此のまゝく道と云ハ能通の義之ご釈し給へり。能通ハよく
ことをとし訓ズ海道山道も米銭上下牛馬六畜までよく
と織りてごとくたくなりなきもの小道とは云ふ。一心也自性を妄
念覚念も通くにかゝわるごとく一念乃ここにはりなくハ門為の
なづきやうに。よくさとりて少ごともはかりぬものあり本分乃
大道とハ云ふ。人ハ天地の霊なりて。よく道を学ぶべき物なりた

まるがはしてはやりに略し若きはいと口をしき事なり
べしぱされしぞありふれたる云より拍子ごゝろと云を八諸人の
内るが為さ茂の名をいひ下戸なるゆゑ男ハすけまと
いふハ何れの為ふくを内るがすく通しと云んなりすく通り
と云ハ人にもそこおもすくこと有りたておもずこにもすく通り
て自由自在なる我通達と云んいづれの道を学ぶをも通達
せざれバ上戸にあらざれバ上戸ハすく通りてこそこほらざれバ
道の達者と云ふ小原又酒のむもそこほりなくみだれもなく
いふ好き失もなくすくをりて上戸のごとくなれバ何の道と
小か酒のむ人とたとへて上戸とこそいふめまあしみだれ
あり失ありてこほりあらバ只大酒のみにして上戸りを
おらびさればいふ好道なることを下戸なりと次殺将せざるべく





其極にいたらん事諸道かくのごとし此書に下戸ならぬ
こそ男ハよけれと云ハ絶妙の要文皆是を見えたる義理也
兼好の心ハ志るべし
古の聖の御代の政をもわすれ民の愁国のそこな
はるゝをもしらず万にきよらをつくしていみじと
思ひ所せきさましたる人こそうたて思ふ所なく
見ゆれ衣冠より馬車にいたるまで有にしたがひて
用ゐよ美麗をもとむる事なかれとぞ九條殿の遺誡にも
侍る順徳院の禁中の事ども書せ給へるにもおほ
やけの奉り物ハおろそかなるをもてよしとすとこそ
侍れ
此段ハ天子も諸侯も国民の愁そこなふともしられ
ず下々のくるしみをかへり見給ハざる事を斷悗し給ふ所をさしゆくと

第十。それよりちかみて老中のなくての人は美葉とふ所のおさ
と。と〳〵へ〳〵ふて〳〵ふ。名美葉とこの世い名利よりの
ふ〳〵人の見空而と侍びこのむ事ゑ。又人はよく忍まれ
ば。ものに利ある事とふがゆへ人は別むさぼり思絶の
ふ〳〵とおもふしておよそ美葉とかざるいふ分を見とも。
也捨ふ〳〵の人ゑ。又人のりく者物とうり物とぞ。ふ〳〵
ものを分とふ見ぞ。ものれが分に色て美葉とふ
いを見ふ〳〵いのむさぼるゆへ人は大やけのまり物を
ふ〳〵そう物とをそよ〳〵ふとゑ侍ふと。順徳院の事
也と説授ふ引〳〵いゆへ〳〵めさう。よ〳〵ふとつもて美葉
ぞこの世ざし

第十一　いみじ〳〵ものも多こ。この世ぞ〳〵ん男ゑ



ゑ。それは後成の家に出家ゑ人ゑのなく〳〵ゆへ
一往ハ好ゑ〳〵見ゆれ。再往ハいゆへ〳〵ゑ。ゑ人ゑ
家乃云系に物のあれハ〳〵云白ふ三つの所あり。一つ〳〵ハ
ゆれむ〳〵云ん。二つハ者あつれ〳〵云ん。三つふハあゞ乃ん
物ふあれむ〳〵云所ハ歩のんなくば物ゞに歩もかさけも
ゆゞ。色ゑ〳〵きんのれゑる〳〵ハ只ゑ〳〵ゆこふ〳〵云ん
ゆゑあつれ〳〵云所ハ分物ふ法がすくなゑ。ゑ〳〵ふ人ゑ
ゑれ物の人ふも又この世ゑ人ゑ也物分物式
たゞなゑ。ゑれば女のなれ世なりゑ世ば衣服も冠もいゆゑ
あゑひゑつゑろふゑ。ゑ侍ゞ〳〵ゆ歩ゑる人ハ分物
ふ法があれゑれふなゑ。ゑ一往のんゑ。三あゞれ〳〵云所ゑ
ハゆゆめゑ。あゞれハやゞれゑこなふんゑ。ぱんハ歩せゞば人ハ

人のおもひ侮りたるこそ、いとくちをしけれ。されば、いかなる事も、
しばらくこらへ、堪へ忍ぶべきなり。その人、あだしの世となりぬ
るを、はかなく、口惜しと言ふ。されども、我が身の、ほどなく、
やがて、その人のあとを追ふ。生死の道、かねてもまた、近きと
なり。生死の一大事、いまだ、思ひ入らざるにこそ。
男、ありけり。年、七十に余りて、侘びしき事、
再び、思ひ返すべきにあらず。されども、命、
惜しむ。恥、忍ぶ。世の盛りなる姿を、
見るにつけても、我が身の、衰へ、
ますます、あさましき。
人の、子、多かりけり。
男、ありけり。
年、七十に余りて、
侘びしき事、
再び、思ひ返すべきにあらず。
命、惜しむ。
恥、忍ぶ。
世の盛りなる姿を、
見るにつけても、
我が身の、
衰へ、
ますます、
あさましき。



世の危ふきこと、なほ、朝露よりはなほ、
ひとしかるべし。
家、
小さき、
あるじ、
みづから、
はかなき、
事、
なす。
いとさうざうし。
妻、
子、
ありて、
下ちぐ
はぎ、
ひあるべき。
寂莫、
まして、
さうざうしかるべし。
恥、
なし。
人間、
忽々、
営、
荒勢、
なり。
世の人、
皆、
この
ごとし。
この
世げん、
と、
は、
出家、
遁世、

ハ世をあう男とおもてうちうちていあるこの知識ありこの乃老
んあるへくぐに嘆ケバ世を厭もいと浅境の面ごちぬるとも
うあるなど。霧霧面風をいとつぶ弱ありうバ実にそうく
かぐし。さしバうを人の親ふるのを出家遁世などせんうと
らひてきづひのを業といひ又ふなすれば世の人もあるぬ
さあの分ねるをおりひて。ろくにあ法をめいを城
ぐうをて我をのれりくとほむふんのいあるべきと
扶ハいでしそう世のぐんぱふをてうをこのあるぐん
分となんぱいぼくふすをてうをくなんとぐやかく
楽しぬくれ世一大事ふるうん事をのをらひてほ世の
事ハ多ふつあんさあらバあふさきうをふたりひみぐれる
とあるなるぐしを嘆いとそうく嘆ありさあなり

親ハいさ先世の扶くをとほくむふんのうあなく。
あふさきるふちふたりひみぐれ　そのたや結とをそく
親のあとつげしさあくバなやへの不者をぐしとほ世の
人もるやかくとおくるといるみてをれとかくをむとすふ
んのひなすれんぱうを往ふつぐぐきをちぐひるの在きと
見ものをとあふさきをきにらひみぐれとを
さあハ花をう祢ぐちに　どをんハ一大事とたをふんを
をう祢のをて中くあるを祢の事ハなるをを扶
ひるを祢ぐちにをあを南を者にひをうねのをあくわれど
いあるわやをんあをう祢とをあむんのたる事もをあう
を時ひをう祢のんが姫を祢のんといあ南めてをうをく
をあうなるんやを世ふをを世ふてかをれめふハあひ

つま。去程に佛の女人ハ地獄の使なりとて佛乃をしへと
外面ハぼさつに似て内心ハ夜叉(ヤシヤ)のごとくとこそ說給ひ
つま。それと愛してこのむ心ハ我身ながらのいとほしさぞ。
かゝれバ先何とかくしてもとつ心といふべしむまれてハいま
しめられて娑婆のつねの心がすまぬてひとつねの心がかはらぬ
先を祈る事ニハいふなり

遠ざけ給ふ夜なれバこそおいしまれ　ごえんハ善人
祈や小入る人ハ祈るやうに見えぬ。祈不叶ハあはれとたてゝ
てゞ身ハかぎりに致し念佛誦經陀羅尼とゞめへ往生
五更必案なじみく申ざろむ夜ハなすこと。選(セン)子内親王
女小ぬる夜かくはとりて女人をあはと汁女のごとく出て夜も老の
（菱の中小をくる身そうき）
くとはまじ給ま次。熱て我するさぬる事と申し候を



まゞ遊しも夜の祈られぬとのことかくる身ねの人ハ。歯ごゝろに
殊勝にをだふとくもあれバこそれといふなるべし
法をとてひとすゝるをいはれるかくをふにハあらで
とこんハたゝれるまとたゝれぬまと東(ヒガシ)事をそへ一
大事を心ん人ハ立てすゝるをされぬ事にすぎとくぞどし
へしんぞ立てすゝると云ハ一向の心文荒くへの心ぞ。一向と云ハ
ひとめをかんびてむきなるといふんぞへしと云ハよりそれあさ
と云んぞ流ぞとよども只それぬふくハなすし一宗をえ
れかびく人ハ是をれかしとかくい用しめるんふく立てちか
をされる事ふハあそしと云なるべし
女ゝりをもやをもそか次。心いまんとておもう波かしかる
（けるハ玉の巵の底かさらくを大きくいかるとゆくゆくし）
（玉の巵の底なき心ちする男のこと）
顔さわげざなまゝ

〻えんハ女ゞ男と出ハ〻ゝ〻れてゝう。爰この頃ざる男〻は
ちゝで。又むまとつゝいろゝくにそゝれても山男一大事と
んようけ六巻乃樂欲とゝふるけんゝゝゝ心中ゝく女ふをぢく
〻ゝなゝく一向にゝうあゝめんぞれバ女のんきやきかび袖く
うめゝれ男や情もちゝび多もゆくんぢよれ多巻ハ玉乃
危の底なゝきんちゝゝう男うゝゝうみかこちゝゝゝくゝゝを
女のきやすゝゝめ有程く。女乃んやすゝゝねぞゝゝうゝきゝう
ゝれで女乃男と恋ゆゝてゝゝゝむ純と見てゝゝう。ゆゝあを
ちまにゝ見ゝば唯好爰のいゝまゝめく。徐仮ふを爰とい海ゝ
めゝれゝもゝゝゝゝゝのむとんゝまゝ考ゝう。山仮ハ月ゝこのむハ
云ふ及ゝゝび。女のまゝうきゝをひゝすゝにゝゝゝをめゝゝ
ゆくゝあゝぞゝゝかゝくゝゝ海ゆゝめゝう。或又ふ拾明院ゝ女后の



伊ゝゝゝゝゝ

又ふかく信じて信じてをこたらしハ業ぬのがれがたし
ゆゑにいまやすらゝに心をかゝんこそあらゝ面かしかるべきわざ
なれ女のこゝろたらぬてもきえぬしと云説授記ハ此
ぬるなと、南無むる要こゝろいまゝ〻ともかくなるべ
くゆえてだたゝれすゞれハ此面ゞひなり若見れは益こゝろ
えゝれ業理こゝ業ぬのかゝまゝゞ

後乃世の事ハにゝ見まゞて　今此後ハ前後の諸文又
前後の要こゝ云ハ女のすゝたゝれてもほの垂れ事とんか
ゆゝれぬ人ハなふおぼまゞ。ゝたゞれぬまゞハ必定合地獄
に墮てはるゞのゝゝのゞるこゝて佛ハ説きあひしなり
こゝろこゝいゝゞるをなゝんこほの垂とおこひはゞるれを
女もこゝろふおこ信じく。なのゝもゝあゞこゝゞりて



こゝゝ念佛通途のにこゝめも面めやふすむべこゝんこれ
後の世の事とゆゝれぬあるこゝ面なり

佛乃ゝこゝこゝぬんふくゝ　こゝハ諸悪莫作
衆善奉行のんゝ此文ハ信くの悪とにゝる事かゝれゝる
くの名とをなひまれこゝ佛のゝんゝ捉こゝこゝゞハ
女のすゝこゝれこゝもんうゞくゞゞ昔慈恵信正ハ
門ゝこに門乃女房此分とみてこゝ
こゝみくたゝれゝん。分のんこゝ信ちこゝハ凡夫乃法
むゝちこゝハ佛の法ん。ゝゝかゝこゝハ通のこゝん凡夫の初ん
より佛果の極位を通こゝ佛ゞみとや高こゝこゝ
云后の南ゝすんゞゝ。南ゝて信正なゞハこゝゝる女こを
あひ信ひこゝと。こゝれ分なり信正乃ゝ

いそやく むきてもみやいう栗乃 さめハひゝ〻ひれちもゝそすル けんハいるやゝくとハやゝくゝえんん
むきてもゆんゞやいゞ栗のゝ ハいゞ栗ハれゝ後しきゆめく
つ後くむけバゝと損ずゝん。ゝとつけてゝんバゝそ。けて
くいやかいゞ栗うるゝ多の乃といゞ栗たゝもてゝゝゝ
後ひゝゝ。ゝめハつゝびれちゝゝすゝゝハ栗ハゝとつゝ
ゞてゝゝ。ゝけバゝとのゝゝ。ゝそ。ゝくゝゝ。
てゝびハれつゝ和なゝ。我も今女のゝゝゝゝゝ
おゞろけふゝ。ゝむんゝゝゝバゝゝくゝゝてゝびハれゞき
なゝゝゝゝゝ

〻云〻ふのひぐきに飛ありてゝたゐ中。ゆゝて飛ゐ
て及ばぢゝそんすゝんゝ云〻ゝ紙ゐ及て待ゝ。配所を物
静かゝて人の住来も稀ゝ面ぎるゝまなゝしばゝとゐづゝ
んゝ忘ゝ云ゝ世の事ハ。ゆゝをあし只分と都ふゝ待ゝ
やゝくせんゝゝわゝ面ゆゝゝ。ゝ只ハ見ゐ及ゐ。ゝ只
分ゝの静なゝ我このみゝく飛ゝゐゝを及ゝゝぬゝ事ゝ及て
ゝゝ。世俗荘老のゝんゝ行ふをかまゝ俗只分ゝの静ゐゝとゝ
ゝ事ゝゝゝ及てゝゝゝ及ゐゝ

我見ゐ及ゐんゝごゝなゝゝ。事ふも。増ゝく教なゝゝぞゝん
ゝゝゝ

いけばゐなき事ゝこゝにこゝ二ワよハもゝゑゞくすぐれるを。親
我子孫の人ゝをぞぐしぶをぶバ成ハ慢じ成ハとごを成ハ人となひが
ゝ為ゝ子ふこゝ。かりそ人の親のんハ〻〻ゆゝかゝねどもゝ成
ゝ子ゆゝよかばんのおこるゝ古今にゝ人のおやのんハ為ゝにあゝ孫ゝを
子孫成ゝ為ゝゆゝよかゝる邪ゝとおりふみちにゆゝよひゆゝる邪
為て為ゝふゝ。諫の為ゝ勝ゝにゝごくなゝをゆけバ諫の為ゝまゝ
とゝふして口ゝ為ゝきゝこゝ。けゆゝよきも為もゝとゝふものなくて
あゝをなんゝこゝて手ゝ為ゝを。又世ゆゝにゝふをゝふして為ゝくなゝぐゝき
仏神とも因果ともかゝちてそゝぐゝんとゝゝゝむゝる人おほゝ
諫ゝとゝゝ為ゝるゝこゝゝゝくゝゝふひゝゝゝ

ひのりをやぬびんやとこひしゝまにて。こゝ訳れをるに到ること
ふくゝとこふこゝとかくくうゝみ不足のんを取しゝ物とかうん
とこゝハざしハ貪欲のおこる事かしゝ。仏事にもそむぎしハ
脂恚(シヽイ)のおこる事かしゝ。陋くおそひぢくしハ邪ゝうるゞ
者りなる物ハあゝゞ。ちとうゝて。ゝく恭へなげくを
を縁の事ゝ。ゝ上乃ゝあと出ゝむハちゝとかしゝどもゝくもゝ
らぬ物ひなしハ。ゝくゝ叶ゝ恭とわを向へてんぢゝれたをけ
となんべゝ。さあゝゞハされぐるの善悪のゝあもなを
のこゝゝ親乃分んのあ乗れを先とを分ゞをなり。
向ゝをゝなる人の云ゝうう向ゞめれ女ハ地獄ゝ為く
地んゝゝ。笹乃拍かるゝとて。とゝゝし地ゝむ人世にれ
を縁ゝなる事ゝ。ちゝの拍ゝとれを向ゝんの後まて

念仏法死尼と唱へハ仏ようなべゝ。いゝゞく笹乃拍かる向
べきやゝ。ゝ。ゝ向ざるゞ向へに笹の拍かるハ地ゞ。ゝとうま
ぬ人ハ去きゝにかゝゝがゝて。ぬゝ。ゝむ見向ゝを縁ゝなゝ
法ゝ書ゝけんぞくもあゝ向ゝ材宝を皆ゝ世ゝゝ宝ゝ
ゝ事ゝ。今文人間の支えに地ゞ死ひて叶ゝあ石なる地
ゝなれ人ハ先を地ゝゝ。醫者法陽師と祈ゝ仏神ハ祈
楚ゝてゝ向ゞにゝ地死ひ求る祈ゝ叶人地獄ゝ為ゝ時
獄卒の云ゝ叶去ハ叶ゝあゝとゝれこのゝ死ひゝ者ゝ叶あ
事ゝがゝれなゝゝバ地んあゝく笹乃拍かる祈叶ゝあ事ハ
ゞ。ちゝゝバ笹の拍かるゝせゝゝ云。ゝハ皆人の叶あゝ地
死ひゝ。むゝひとゝゝハ次んなゝゞゝ。ゝ地死ハ限ゞ
仏のゝても叶ゝあ事を祈ゞゞ笹の拍かるん事ゝゝひ

七段

有べうしかは世間はまなれ人ゆゑまなびうしなひし人の
熱欲の為ゆゑに事しげし段と見てとう
ゆゑ〻に事〻繁清の間形く多紙山の煙立ちのぼ
ゆゑ住まれ所なきひとのすがたに清水
形をん　思ひて繁ハ朝夕に清水
られも此く為住て島郎山の煙も立ちのぼ事住
なるゆゑひなしばあれ形る事ハ行〻ひ繁ハ朝夕よれ
かり煙ハ志ばしくもひ海の事なく立ちのぼてこそ
あるべしなし。何ごとを考住なしぶ物乃行られハ形るべきこと
世人よいふ物のあれもなりんと云
世を立ちぶ見なれこと云ていみじ事を　上は繁と
煙と定ゆゑこと徒事を世ハ定めゆきことと云く一切乃



世事と事しる。此云系為後とむ此段乃要と行ごとを
ちぶ物なれ住ゆれ車ハなれでとなり此人ゆ定め
ゆきこと云なり
命あるものと見なよ。人ゆゑ久しれハ形。かげろふ
乃夕と消ち。夏の蝉ハ春秋を知ぬもいるべし。
住くゆ〻一年ゆ〻住ぶ物をおとなりゆ〻
や。あるべしし思ひ。多年を過ぬ夏の
ゆゑ住せ見　命あるものゆ一夜の夏ゆ
せめゆゆハ短命をなげく人のねのいさあゆ見ゆ。也ハ
人げを久ハなりとて次よりげろふ乃夏ゆ
て去ハなくゆゑ一年とゆ次とゆ必一年にゆ
的年を苦し。三的年も年を年を。徒老人住去命

おろかなるものハなほしとて臨終せよといさめゝるんなり
往生をねがはぬ世ふぬるまゝにすぐさを待えゝのハせん。
いのちながけれ共ハ辱（ハヂ）たほゝ〜かぐくとを
往生をねがはぬ世ふるに髮（カミ）ハ白く月ハうさく什（シル）るゝ。歯（ハ）ハ動（ウゴ）
揺かゞ南無ぞ〜ぐ〜れをうさにかなうこと。世ふ南〜ろハ大ろ
をぐなしぶ〜ぐ〜んねしなり
四十（ヨソシ）にをゝ〜ぬ往ゆゝ〜まるんこをめやけうべけき
そのかゞ〜ぬをまゝ〜ハ形ををびるんをるく。人て
お南〜ら〜蓮こゝ〜ぬ〜ぬ〜ぬ

しそれの来迎と待べきんぱかほ人のいさのびきそうんあそ
徒とをもしとそ拙ものべ〳〵毎日重人老迫述懐と談ふ
家にみな人ふをけらゆく老の身をかなしむ色にいろ〳〵ちする
ものは人ものも〳〵まつ〳〵　或古ものう　老の坂のかまたやうく死出の山けふこそ思ひそ〳〵ふえとせよ
とそれぬやうそをみるのなく　又　老らくはこうこうなるうくうなる命をつれこ山を　まつ〳〵
射家　ふえしこはなふはのうたうと　ほだ佛　唯ひとり西方をとりもれぞん
きぐふは世の事とをくにとめまれいさあと見てうう
世乃人のふ間ぐ次事。食欲（シキヨク）ふいきうぐ人乃うら絡ふ
を絡ひ明るものるの。白ひ。ひるぐ（ンジ）けかまれものなるう。
志ぐ〳〵を衣裳（イシヤウ）よ事まれ物をとをうれ〳〵えるぬ
白ひふをう。ものぐ〳〵ふれめをするものあ里久米れ仙人（ヤマビト）
乃物あふふ女れをれの白きれ見ん〳〵通（ツウ）とうとなひ
事毎ふ間ふたを見ぐ〳〵なぐのきよう（ウ）ふう。肥



あぐづきをもうんぱ。ものの食なう孫ぐちをけうん
かし　見まぐとうけて一度とをうふ化のなの度ものぐを
あ〳〵かぐきん。その中ふけ度ふ女乃六菜に男乃間ふひし
六招の罪とい間〳〵めうう文をしを見てうう。よをく始終
乃ふに六菜乃楽欲おほ〳〵しいへども。みな厭離しつ愛〳〵
しをう衣裳小蓋物をしいふ香菜をそれの白くを
見はぐ色のきようにれあぐづきうふ食菜。髮れ先ぐ
うれをそも又食菜。物いひうけをひをそふ麦菜。ぐて
女乃うちうけ〳〵いつ中に交合ふ鶏菜。欲疫吸ひを
味菜。又菜にうをて食べに分別をうふは菜也をれぐ
六菜とつ事て二度とをうふあ〳〵かぐ〳〵一度をう〳〵
をうぐうれふ六菜ぐにきびをかふよく笑てます

女は髪のめぐたくんこそ人のめでぬ所なこのめを
人のかぐんぐんなるべきは拍子ちいひうるまもひま
こそそものごしあをきるまに事に出れるうち
あるかちまあをくの人のんと面どりそべて女のうち
ごけさをはいを祝ぞ分とおしとおりひきそば。
うもべくをいつぬいぐにもよくさくあ思ぶはは女城
男ふぐ思へなり　よ足そぐおのきまうう肥あぐづれうは
おの女なう祝ば仏人の迷ひ事ちをあんうといひて
次よおのをとあげうちうくくろべーさもべくもあうぬ
いぐにもよくさくあ思びぎやくさんあるくあをおうけうる
きさぬにおあーて男れんと面どいーなやまんにうあひ
うおの女あをを仏人なをば迷ふ面うぐ人はをぐいうひ



きうおのをあをおなぬ女ふを会はふくく迷ふん
おのをくいえるうめ白い衣裳にとめ蓋拍子
うを髪のめぐされは油のつや面の白さはうれをん
をはびうのうはいつきは紅のむう墨の黒きは鉄漿けぐさ
歌ちのはぐく姿はふ神のりやうんぐくの色さくくるやうは
女とふぐ思へ実ふよくぐふに皆色はうあひのぐーらくあく
一くくれおのをえ只ふ足そぐおのきまうに肥あぐづき
うれをむまをはうくその面の女なう
面こうに髪（アイ）黄の花拍子く源（ミナモト）ごとーし　とふふは
髪黄のををまーはけ分といふ形う拍ぐと面くくるれば父母をが
ひのを黄あくまれうーはけ分なれば金神が黄黄れかさ
はうまんされば拍のふくあをつきうるとば身分にとうーば

父母の胎藏が我身の皮肉に成て骨髓よりこなる也
ゆえに親子と云ハ おや おほぢ
おほぢ代々の先祖と
成ても成ぬ成しなれば親子なり
又生て世に出る迄の生れ出る
おびゝ迷ひ出ぬ迷ひ出ぬ
ハ親と生て世にあるとても
成ぬ親なきゆゑ親子と云なべし
世始の業なり
六塵の樂欲に
その中にあるものの
捨。



不和
六塵と云ハ前にあるを不和樂欲と云ハ
厭離と云ハ
山河大地草木樹林人畜
同ふる不ふるを
世中ふの肉ゝ
流生ゝ
ゆる不ふるを
世中ふの肉ゝ
ある物ハ味塵。
くふ別ふハ
おほひなるゆゑ
不和樂欲と云ハ前にあるを厭離と訓ス。六塵の樂欲おほしと云ハ
山河大地草木樹林人畜
同ふる不ふるを
世中ふの肉ゝ
流生ゝ
ゆる不ふるを
世中ふの肉ゝ
ある物ハ味塵。
くふ別ふハ
おほひなるゆゑ

六塵のなかにかのやめがたきなれば四どひの六塵あるべからずしかれども
骨身にしみこまるる代くゆづるものなきなしかるにかくなれば
いとはかしきものなれば老るも若きを智あるも愚なるも
なるをかなしかるべかなしとは見聞するに人間にて云ふ六塵の
楽欲をはなれ厭離しがたべしといへども一切の見聞見知の事
なるべしや如何。答て云ふ古人の事
六塵かの四どひの六塵と厭離せしいにしへ古人よ
三界はおのおのの中にてかくのごとくなれば
はりくるしみをかぶりてきり　又五月五日賀茂の
我ホガ身ハ死の来ル只今ホリヤウトンヲ
物乃ムクヒ代ムクヒ次ニ
りもむは六塵也かやうの事と厭離しつ
ふしぶ女乃髪をきりとるなり
とよろこぶ縁よハ大象もよくはなる



ぐるを女のそけるあるべきふるくはなるを笹小ハ秋の
庶りるべしとそいひ侍へ侍ら　と云ふ女ハ
世界ハ人ハ髪をそけわげくそれつてしめと義しかも
諸小女の世界が髪をきりにもきるとはなるく大象もよく
つるをしそけるいのぐめをよく世界をきるとはなるく秋の
庶も必ずるをく命とうしなるん庶も妻也ハ分命ハ
ほうがしく人も女也人小兎ん也くくむはんをめぐるこれ
四どひハ庶も人もかるることかしはて侍を分ハ
書也小ものをとも書て笹にはる
去ると我身のくふるをいはる
きをつきをつる程よいはれる人もを分たるハ四どひ屋し
必を分べるべと云ふと絶ちの白小ものくハ四めてむなる
屋くほくしむべきハけ四どひこそうをしハ律ハ法小ハ女と

もろの悪に対せんといへるあひだ悪に在らざれば善
の氣がうけらるゝなり。又經曰女人は地獄の使断佛
種子外面似菩薩内心如夜叉一見於女人能失眼
功徳能障聖道大地不可見女人　経文のこゝろは説法の砌
めをうる女なりとみて、いろあるがごとく法は城
内なりとはまことうつくしけれども佛の
さとりなる成女よりつくる法とまことうるはしく佛の
かがみ菩薩ふかくこゝろ柔和よりはやしをなんとは地獄へ
ゆくべし別鬼なりと云又のごとく云ふ沙れたる女と
ゆくと云て念佛ふるしば別佛のさとりをまなぶこの
功徳とさとるべき人大地とみるべきとてふるまひ
行とをさとるべきなり大地に大地はみるとをみよ女人成ぬ



眼の功徳とさとるべきなり大地はみるとを女人とみるべきなり
と説法也又云云云はは月あくまるのこゝにあるべき耳にあて
みるべし。鼻ふかいて見るべし。舌ふかなめて見るべし。身ふかふれて
みるべし。意ふかふれて見るべし。云云義ぶ六根
つくる也。まして女ふたりとうるとこゝろ。経文は大地はうる
とを女人と見べきなり。説法は六塵の樂欲おほしとて
でも皆厭離しにくべしといつくしき又の姫流女とをとゞ
れをば地獄へとも成なるのおしば地獄の使なりと行基菩薩
みづからいはめくべし。されば成佛くしむべきはこの
成ぬるなり　云云
問云背分に志ありとも妻なしばやめんとをたかなり。
ちまたにて教化なるふはにぐいはめをとれつゝま

むや会テ云ッ合物かければ鍋鬼も断合し。猫を寄ろ
須ハ寄ぬくるべ。ぶ小ば世とものゝ孔仮世とを形ん人まと
色小用ゝかゝゝ人め棒なる和小に者ゝるて境界ゝ
ゝ孔ゝ小ば鍋鬼の断合ゝ猫なゝゝ。色刈ゝ用めゝ
てゝゝゝ。ゝゝ孔ゝて戒とゝゝん只ゝゝゝゝ
なゝてのゝ孔ゝゝゝ。ゝゝゝゝば用ゝゝゝ多ゝゝゝを対
用ゝゝもなゝゝゝべゝゝゝゝけんと相分に寄ゝけよゝゝゝ悪ゝゝゝ
ゝ孔ゝゝゝゝ

見ゆるを　こゝハ物を行ごとにたゝらぬ所を見ぬるゝて
すけをとゝをこハ行くゝろあ見ぬるみちと学ぶ
おほくの学くみのぶんとはたらてみたるて庵の
和尚（さうか）見ぬ所ゝ（しゅう）くゝえ物ゝ調度ともなるべ事。
前栽（せんさい）の草木すぐれ面なるべ所たゝらなるを
見ぬ所めをゝゝ（しゅう）くいとゝゝし
こゝハたゝらなる。仕なるゝゝ人間の私ゝく見ぬ所を
あゝびとゝゝくさしゝも世中にかゝる事とすれぬ人の
むふゝくみをゝる事ゝゝ（ナラ）ゝらゝ所ふたぶ
自然なるハ所なるかゝ仕るゝハ不可ん院ゝ可不ハ一條
なるゝゝのとのかゝゝゝのゝゝゝん所人ハ我身ゝ非ゝよを
ゝゝこえて人の分ゝ上の評判とするん事ゝゝ。

巣ゝのゝハ事ゝ所ゝゝゝ

宮乃れい殿のものにいつぐや縄状
ひうしゅうしゅうばかのたゝし出ることを待ます。
珠や爲七むまるくゝ沈の鞋とらるゝれば法続ぐ
かるゝ海也給てなんとゝ人々結ゆゝしゝてけくゝ
いみじくゝてゝ笑てしゝ徒大なるあをいろめる虫の
結り事哉　こゝんゝおほに大なゝゝ家居ふゝて事さ海ハ
ゝゝゝゝ海まゝいひて。又ゝれまゝゝぬぞゝゝゝんゝ状
ゝゝゝ路絶お家なゝ海ゝに出ゝ釣ゝ虫ゝの結り事んゝゝ白が
おほ二段の要ゝぬゝ釣ゝ人も朝夕月小が海原よゝ分立て
ゝゝ海ゝゝ出ゝゝゝゝむべきハ什云義也西りの出殿乃ゝゝん
さぞゝゝに。ゝゝゝて甚後ハ釣ゝぢゝ名れゝぬゝ釣ゝ虫ゝの釣ゝ
ゝゝゝで見ゝぬゝゝるハ西りのんが事ゝぬゝゝ事也